

実践報告

児童の「主体的・対話的で深い学び」を育てる外国語活動の取組

— 第4学年の実践を通して —

松下 大介

An Approach to English activities for improving Children's "Independent, Interactive and Deep learning": the 4th Grade's Lessons

Daisuke MATSUSHITA

【要約】「主体的・対話的で深い学び」の実現する授業には、児童の学ぶ姿がどうなのかがカギとなる。本実践は、5月の授業実践において本校が活用している「学びの姿をみるシート」から得た課題を基に改善した児童の「主体的・対話的で深い学び」を育てる外国語活動の授業づくりの構想とその実践例を述べる。

【キーワード】 外国語活動, 「主体的・対話的で深い学び」, 学びの姿をみるシート

1. はじめに

本校外国語活動・外国語科では、「慣れ親しんだ語彙・表現を使って、身近で簡単な事柄についての自分の思いや考えを、内容や構成などを工夫しながら相手にわかりやすく表現しようとする能力の育成」(本校紀要第5号:201)を目指している。そして、外国語活動では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、『聞くこと』『話すこと(やり取り・発表)』を通して、主体的にコミュニケーションを図る素地…(中略)…を養うこと」(同上:202)を目指している。筆者は、本年度から本校に赴任した。本校赴任1年目の本年度は、5月に研究授業と授業研究会(以下、5月の授業実践)を行った。本校研究部の提案資料によると、本校赴任1年目の5月の授業実践では、研究紀要の各教科の要項について、授業者なりに解釈をし、具現化する指導案の作成と授業実践が目的とされている。そこで、5月の授業実践を通して、これまでの筆者自身の授業づくりや実践は「主体的・対話的で深い学び」と言えるのかという自身の問いについても振り返る機会となった。

本実践報告では、5月の授業実践において「学びの姿をみるシート」を活用し、その結果について考察して、児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現する外国語活動の在り方について考える。そして、見いだした改善点を踏まえて新たに授業を構想し、実践したことを述べる。

2. 本実践における研究紀要のとらえ方

今回の授業実践では、現要項(同上)における外国語活動・外国語科の研究の中心であるCAN・DOリストの活用とTLCサイクルの実施を取り入れて単元及び授業づくりを行った。

(1) CAN・DOリストの活用

現要項では、本リストは、教師が児童の達成状況を確認するためと、児童の主体的な学びを促すために活

用する。現要項によると、「単元の学習の始めに目指すべき姿として示したり、単元の終末に学んだ内容を確認したりして活用する。児童の生活場面に密接に結びついた文脈の中で互いにコミュニケーションを図り、外国語で伝え合うことができたという達成感や自信を高めていくようにする」(同上)としている。本校のCAN-DO リストは学習指導要領に沿って作成されているので分かりやすく、更に反応についても記載されているため、数多くのやり取りが期待される。

第4学年では、表1のようなCAN-DO リストを設定した。そして、5月の授業実践で行った単元についても表2のようなCAN-DO リストを作成した。

表1 第4学年のCAN-DO リスト

聞くこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）
(イ) ゆっくり話されれば、短い話を聞き取ることができ、基本的な表現の意味が分かる。 ・うなずくなど反応を示しながら聞こうとする。	(イ) 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の気持ちや考えを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができる。 ・質問したり答えたりしようとする。	(ウ) 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物やイラスト、写真などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを話すことができる。 ・発表に対して反応や簡単な質問をしようとする。

表2 本単元におけるCAN-DO リスト

聞くこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）
(イ) ゆっくり話されれば、短い話を聞き取ることができ、基本的な表現の意味が分かる。 ・うなずくなど反応を示しながら聞こうとする。	(イ) 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の気持ちや考えを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができる。 ・質問したり答えたりしようとする。	

(2) TLC サイクルの実践

TLC サイクルとは、「互いを思い温かい配慮が生まれる時間にしたいと考え、Think(考える)、Learn(学ぶ・学び合う)、Communicate(伝える・伝え合う)の3ステップを関連付けながら『思考・判断・表現』を深めさせていく循環的な学びのサイクルとして設定する。本サイクルは、自分が伝えたい思いをどう言語化するか、どうすれば伝わりやすいかを考え試す場であり、実際のコミュニケーションを通してことばを定着させていく。3つの過程①Think: どんな情報を伝えるか、どんな言語材料を使えるか②Learn: どんな工夫をしたら分かりやすく伝えられるか、どのように情報を整理するか③Communicate: 言ったり聞いたりして実際に伝えることができるかを経て、相手に伝え合うよりよいコミュニケーションを図らせる(図1)」(同上: 203) 過程モデルである。これについて



図1 TLC サイクルの3ステップ

は、意図や言いたいことは理解できるが、本当に単元のだけでよいのか、1単位時間にもTLCの過程が見られる場面があるのではないか。また、TLCがいつもあるとは限らないと考えるので、どのように活用できるのかを意識して単元や1単位時間の授業づくりを行う必要がある。

これら(1)(2)のことを、踏まえて5月の授業実践に臨んだ。

3. 5月の授業実践

(1) 授業の概要

- ・単元名：「何曜日が好きなのかな？」(“Let's Try! 2”Unit 3 参照)
- ・実施時期：令和3年4～5月(本時(5月の授業実践)：4/5時目)
- ・単元について：

本単元は、児童の生活に身近な曜日を中心に扱う単元であり、児童は学校の時間割やテレビ番組、習い事などで無意識のうちに曜日に触れており、思い浮かべたり話しやすかったりする題材であると思われる。そこで、単元のゴールを、「クラスの友達の好きな曜日ランキングを作ろう」と設定した。単元を通して、Sunday, Mondayなどの曜日を中心として、既習の言語材料や時間割、一日の過ごし方を表す表現などを用いて児童の活動や伝えたい内容の表現に慣れ親しむようにした。そして、慣れ親しんだ表現などを用いて、好きな曜日について友達とやり取りしたり、やり取りしたことをもとに発表したりするようにした。インタビューしたり発話したりすることによって、自分のことを振り返り自分を見つめ直したり再発見したりするきっかけにし、自己理解を促すことをねらいとした。更に、相手に配慮したコミュニケーション活動において言語材料を活用し、友達とやり取りをすることで身近な友達について新しい発見をしたり、他者と関わる楽しさを感じたりできるようにした。

本単元の指導においては、曜日という児童が毎日触れる題材を用い、児童の一日の生活も振り返らせながら活動するように場面を設定していった。そして、単元のゴールを達成するために、インタビューというやり取りの活動を設定したり、インタビューの結果やクラスの友達の考えを表に表したりすることで、新しい学級の友達のことをより深く知ることができ、同時に自分のことにも目を向けられるようにしたいと考えた。本時の指導にあたっては、曜日を表す表現を用いて、友達の好きな曜日を推測しながらインタビューし、クラスの友達がどの曜日を楽しみにしているか尋ね合うことで、友達に寄り添い、友達のことをもっと深く知ることができると考えた。本時の学習について、思考・判断・表現の観点から、好みや理由を尋ねる表現を用いてインタビューを行うことで、クラスの友達の好きな曜日や理由という単元のゴールとなるランキングづくりに必要な情報を集めるようにした。その際、友達の好きな曜日を推測して尋ねることで、より友達に思いを寄せて活動ができると考えた。児童が友達とのやり取りの中で戸惑う表現については、全体や個別で確認したり練習したりする場面を設けた。そうすることで、どの児童も安心して友達とインタビューができるようになると思ったからだ。また、主体的に学習に取り組む態度の観点では、単元や本時の活動を見通すことができるように、導入の段階では、例を提示し、どのような情報が必要なのかを児童が考えるようにした。そして、終末の段階では、集めた情報について全体で共有し、本時の活動について振り返りを行うことで、次時の活動を見通すことができるような場を設定した。

本時の主張点としては、「単元のゴールを見通し、好きな曜日やその理由を尋ねたり答えたりしながらやり取りをする中で、『友達のことをもっとよく知ろう』と感じたりさらに友達に寄り添ったりしようとする児童の姿に迫ること」とした。

本単元の目標を、「曜日の言い方や曜日を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、自分の好きな曜日について相手に配慮しながら伝え合うようにする」とし、話すことのやり取りに重点を置いた目標にし、評価規準を設定した（表2）。

また、CAN-DO リスト（表2）を設定し、児童と共有を図った。それを基に、全5時間で単元を計画し、次のように授業実践を行った。まず、1時目には、単元のゴールを設定し、児童とCAN-DO リストを確認し、共有することで単元の見通しをもつようにした。2時目から4時目では、設定したゴールに向かって、ゲーム活動を取り入れながら、表現に慣れ親しんだり、友達の好きな曜日や理由を尋ね合ったりする活動を行った。そして、本時では、「好きな曜日を友達に尋ねたり、学校や日常生活を理由にして答えたりするようにする」という指導目標を設定し、評価規準（表3）として、「学校生活や日常生活を理由にして、友達に好きな曜日を尋ねたり答えたりしている」とした。クラスの友達が好きな曜日を発表する活動を設定した（表4）。

表3 本単元における評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話すこと (やり取り)	曜日の言い方や曜日を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	自分の好きな曜日について、尋ねたり答えたりして伝え合う。	相手に配慮しながら、自分の好きな曜日を伝え合おうとする。

表4 本時の活動の実際

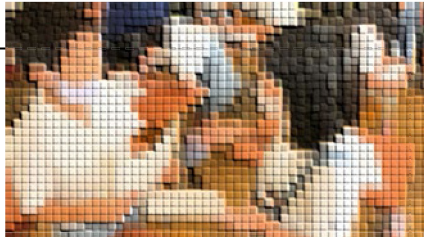
学習活動と児童の反応 ()	
1	<p>前時までの活動の振り返りを共有し、単元のゴールや本時の活動を見通してめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・今日は、曜日を友達に聞くのが楽しみです。 ・みんなは何曜日が好きなのか気になります。 ・理由も知りたいです。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">友達と好きな曜日を尋ね合おう。</p> </div> <p>2 ゲーム活動を通して、本単元や本時で使用する表現に慣れ親しんだり確認したりする。</p> <p>○「カルタゲーム」をして、本時で扱う曜日の言い方に慣れる。</p> <p>○どのような表現を用いて友達とインタビューすればよいか、全体で確認する。</p> <p>3 友達に好きな曜日をインタビューする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>【あるペアのやり取り】</p> <p>A: Hello. Do you like Monday? B: Yes. I like Monday.</p> <p>A: Why? B: I like swimming.</p> <p>A: I see. B: Do you like Monday?</p> <p>A: No, I don't. B: What do you like?</p> <p>A: I like Wednesday. B: Wednesday. Why?</p> <p>A: みんなで遊ぶ日があるから。</p> <p>B: OK. Thank you. See you. A: See you.</p> </div>  <p style="text-align: center;">図2 児童のやり取りの様子</p>
4	<p>本時の活動を振り返る。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも話さない友達の好きな曜日や理由を聞くことができた。 ・自分の好きな曜日を、英語を使って尋ねたり答えたりすることができてうれしかった。 </div>

表4の活動において、本時のねらいに迫るための児童同士でやり取りする時間を20分間設定した。そして、「好きな曜日を友達に尋ねたり、学校や日常生活を理由にして答えたりしているか」という点で

評価を行った（表5）。

表5 本時の活動内に行った形成的評価

◆ 学校生活や日常生活を理由にして、友達の好きな曜日を尋ねたり答えたりしているか。 (観察, 振り返り)【思・判・表】
○ 好きな曜日を尋ねたり理由を付けて答えたりしている。
→ 難しいと思われる表現について、全体や個別で確認したり練習したりする。

(「◆」は形成的評価項目, 「○」はB基準, 「→」はB基準に至らない児童への手立て)

5月の授業実践では、筆者が丁寧なコミュニケーションを意識するあまり、児童の活動が停滞したりスムーズなやり取りの活動を十分に設定したりすることができなかった。更に、本時の流れにおいて余分なゲーム活動を取り入れたために、児童の思考や活動が停滞した。

(2) 学びの姿を見るシートからの考察

① 「主体的な学び」について

「I. 主体的な学びであったか」という点における、参観者の数値評価（表6）やコメントから、児童は目的やゴールを理解して活動しているとは見えづらく、児童が自分から活動に取り組んだり、そのために場の設定や工夫を行ったりしているようには見られなかったと評価された。確かに、本時だけを見ると、ランキングを作るための活動ということが注目される。ただし、それは前述した通り、単元を通して、「新しい学級の友達のことをより深く知ることができ、同時に自分のことにも目を向けられるようにしたい」という教師の願いを含んだ単元のゴールであった。児童も少なからずそのような意識で活動に取り組んでいたことが児童の振り返りシートの記述から見られた。しかし、参観者のコメントにあったように、同性同士のやり取りや教師主導の場面が目立った。この点に関しては、今後改善していく必要がある。

表6 学びの姿を見るシート「I. 主体的な学びであったか」

項目	A	B	C	D	
1 児童は、目的・ゴールを理解して活動しているか。	1	11	10	0	2.59
2 児童が自分から活動に取り組んでいるか。	3	12	7	0	2.82
3 児童は、主体的に活動するために、場の設定や工夫を行っているか。	0	2	14	6	1.82

② 「対話的な学び」について

次に、「II. 対話的な学びであったか」という点において（表7）、インタビューを3段階（1回ごとに着席して同時に始める→好きなペアで行う→異性のペアで行う）に分けたことや児童が既習表現の一つである“Do you like ~?” を使って楽しそうにやり取りできていたことが良かったと評価された。その反面、筆者は1回ごとに着席して同時にやり取りを始めることが丁寧なやり取りと考えていたが、それについて「たくさんの友達と丁寧にコミュニケーションを取るための場の工夫が必要」というコメントがあり、丁寧さとやり取りの回数の両方を解決することについて課題が見られた。ただし、1回ごとに着席するやり取りから好きなペアでのやり取りになった途端、反応したり理由を聞いたりせずに相手を変えようとしていたという参観者の気付きもあり、このことについてもどのようにすべきか考えていく必要がある。

③「深い学び」について

最後に、「Ⅲ. 深い学びであったか」という点において（表 8），児童がこれまでに慣れ親しんだ表現を活用しながら活動していることについて良い評価をもらうことができた。このことは，児童それぞれが慣れ親しんだ表現を用いて活動したり，ランキングを作り，友達のことをもっと知りたいと思うために，友達の考えをよく聞こうとやり取りを行ったりすることができていたのだと捉える。しかし，表 8 の 2 と 3 の項目については，「時間内に振り返りができていない」というコメントの通り，授業時間内に振り返る活動まで設定することができなかつたため，児童が振り返りを通して，新たな発見をしたり学びの深まりを実感したりする点には至らなかつた。そのため，本時で児童がどのような学びを得たのかが不明瞭になった。時間内に活動内容や成果を共有し，振り返る時間の確保が課題として残った。

表 7 学びの姿を見るシート「Ⅱ. 対話的な学びであったか」

1	児童は，慣れ親しんだ表現を用いて相互に交流しているか。	2	13	7	0	2.77
2	児童は，相手の発言を聞いて反応しているか。	4	6	12	0	2.64
3	児童は，相手の表現や様子から，自分の振る舞いの改善を図っているか。	0	2	9	10	1.62

表 8 学びの姿を見るシート「Ⅲ. 深い学びであったか」

1	児童が，これまでに慣れ親しんだ表現を，活用しながら活動していたか。	2	13	7	0	2.77
2	児童が，活動を通して，自分の考えを振り返ったり新たな発見ができたりしていたか。	0	2	14	5	1.86
3	児童が，活動や振り返りを通して，学びの深まりを実感していたか。	0	1	10	10	1.57

以上のことから，5月の授業実践での反省を踏まえ，児童のやり取りの時間を確保しつつ，児童の活動に対する意欲を大切にしながら，活動の設定や教師の手立てなどを改善してその後の授業づくりを行った。

(3)「学びの姿を見るシート」から見えた課題を基に考える外国語活動の在り方

5月の授業実践における参観者の意見や感想を受け，本授業実践を振り返り，改善点等を見いだした。改善点としては，次の3点である。①教師主導の場面を減らし，児童が自ら考えたり活動したりして多様な考えを受け容れられる場面を設定する。そのために，基本表現や既習表現について数多く聞いたり使ったりする活動を取り入れ自信をもって取り組むことができるようにする。②丁寧に多くの児童とやり取りできる場を設定する。そのために，児童がどのようにやり取り（伝え合う活動）をすればよいか試行する場面を設定したり，中間指導を行ったりして，児童が自身のやり取りを振り返ったり改善したりできるようにする。③振り返る活動を十分に行える時間を設定する。そのために，児童が本時や本単元のゴールに確実に向かっているか教師が児童に確認したり教師自身が児童の活動を見取って判断したりする場面を設定することである。これらの視点を基に，5月の授業実践後の単元や授業で実践することとした。これらの改善点を踏まえた授業が児童の「主体的・対話的で深い学び」の育成につながることを考える。以下に，改善点を踏まえた実践例を挙げる。

6. 改善点を踏まえた授業実践

(1) 授業の概要

- ・単元名：「紹介します！わたしのお気に入りの場所」（“Let's Try! 2”Unit 7 参照）
- ・実施時期：令和3年10～11月

・ 単元について：

本単元は、Let's Try! 2 Unit 7 “This is my favorite place.”の単元を基に、内容を児童の実態に合わせて構成した。児童の興味・関心に沿ってパフォーマンス課題を設定し、本単元で中心となる英語表現に出会わせ、これまで慣れ親しんだ表現も使って自分のお気に入りの場所を工夫しながら相手に分かりやすく表現しようとする能力の育成を目指した。

指導に当たっては、児童が明確な目的をもって、自分の思いや考え等の伝えようとする内容を整理したり、簡単な語句や基本的な表現を用いて話したりすることができるように、何のための活動なのかを問いかけるなど確認したり指導したりした。

単元構成を考えると、児童とともにパフォーマンス課題を考え、それを基に逆向き設計で単元内容を組み立てた。

単元の導入では、本単元のゴールをイメージできるように動画を視聴させ、目的と場面、状況を設定した。その後、マッピングを活用して考えたパフォーマンス課題(図3)を共有し、児童が見通しをもって活動に臨めるようにした。表現に慣れ親しむ段階では、方向や教室名に関わる簡単な語句や基本的な表現にゲームやチャンツなどを使って慣れ親しませた。慣れ親しんだ表現を活用し、パフォーマンス課題の解決へ向かう段階では、自分の伝えたいことをどう表現し、どうすれば分かりやすく伝えられるかを試す場として設定した。活動を通して、聞き手・話し手の立場で分かりやすい伝え方に気付かせるようにした。単元終末では、実際に他校の児童と交流した。お気に入りの場所を紹介することを通して、外国語における深い学びの育成を目指した。

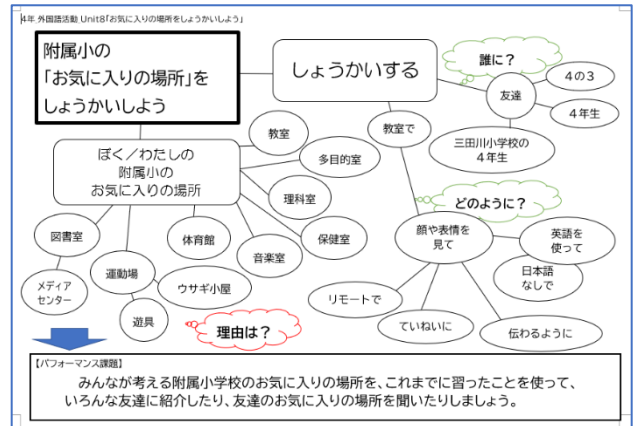


図3 マッピングを活用して考えた本単元のパフォーマンス課題

お気に入りの場所を紹介することを通して、外国語における深い学びの育成を目指した。

本時(4/5時目)の主張点として、「自分たちが考えた『お気に入りの場所を紹介する』というパフォーマンス課題に対して、自分たちのお気に入りの場所について、既習・新出表現や非言語材料を生かし、友達にどのような伝え方をすれば分かりやすく伝えることができるかを考えながら活動に取り組む児童の姿を目指す」とした。そして、本単元の目標を、「『自分のお気に入りの校内の場所をいろいろな友達に紹介する』という単元のゴールに向かって、友達と考えを比べることで、共通点やそれぞれに多様な考えがあることに気付いたり、教科名や教室名、方向の表現に慣れ親しんだりする。そして、慣れ親しんだ表現やジェスチャーや具体物などの非言語材料を用いて、相手に配慮しながら自分のお気に入りの場所について伝えたり、友達のお気に入りの場所やその理由を聞いたりすることができるようにする」とし、聞くことと話すこと(発表)について評価規準を設定した(表9)。

表9 本単元における評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	教室や学校の場所、方向の言い方、This is～.などの表現を聞くことに慣れ親しんでいる。	自分のお気に入りの場所を紹介するために、教師や友達の話聞いて、大まかな内容が分かっている。	自分のお気に入りの場所を紹介するために、教師や友達の話聞いて、大まかな内容を分かろうとしている。
話すこと(発表)	教室や学校の場所、方向の言い方、This is～.などの表現を用いて、話すことに慣れ親しんでいる。	自分のお気に入りの場所について、相手に伝わるように工夫しながら紹介している。	自分のお気に入りの場所について、相手に伝わるように工夫しながら紹介しようとしている。

また、本単元では、表 1 の CAN-DO リストを活用し、まず、教師用ルーブリック (表 10) を作成して、更にそれを児童が分かりやすいような表現に置き換えて (表 11) 児童と共有を図った。

表 10 本時で活用したルーブリック (教師用)

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	◎	方向や教室名を聞いて、どれか (どこか) 分かる。	友達がお気に入りの場所と理由が分かる。	「分かりやすい伝え方」を考えながら、自分と比べて聞こうとしている。
	○	方向や教室名を聞いて、だいたい分かる。	友達の紹介がだいたい分かる。	「分かりやすい伝え方」を考えながら聞こうとしている。
	▲	方向や教室名がまったく分からない。	友達の紹介が分からない。	何も考えずに友達のことを聞こうとしている。
話すこと (発表)	◎	1 人でも方向や教室名を言ったり、紹介したりすることができる。	友達に自分のお気に入りの場所を、方向を使って案内し、理由も付けて紹介する。	「分かりやすい伝え方」を考えて、友達の良いところを取り入れながら、話そうとしている。
	○	助けを借りながら、方向や教室名を言ったり、紹介したりすることができる。	友達に自分のお気に入りの場所を、方向を使って案内したり、紹介したりする。	「分かりやすい伝え方」を考えながら、友達に話そうとしている。
	▲	方向や教室名がまったく分からない。	友達に自分のお気に入りの場所を伝えられない。	何も考えずに友達と活動している。

表 11 本時で活用したルーブリック (児童用)

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	◎	方向や教室名を聞いて、 どれか (どこか) 分かる。	友達のお気に入りの場所と理由が分かる。	「分かりやすい伝え方」を考えながら、自分と比べて聞こうとしている。
	○	方向や教室名を聞いて、だいたい分かる。	友達の紹介がだいたい分かる。	「分かりやすい伝え方」を考えながら聞こうとしている。
	▲	方向や教室名がまったく分からない。	友達の紹介が分からない。	何も考えずに友達のことを聞こうとしている。
話すこと (発表)	◎	1 人でも 方向や教室名を言ったり、 しょうかい したりすることができる。	友達に自分のお気に入りの場所を、方向を使って案内し、理由も付けてしょうかいする。	「分かりやすい伝え方」を考えて、友達の良いところを取り入れながら、話そうとしている。
	○	助けを借りながら 、方向や教室名を言ったり、 しょうかい したりすることができる。	友達に自分のお気に入りの場所を、方向を使って案内したり、 しょうかい したりする。	「分かりやすい伝え方」を考えながら、友達に話そうとしている。
	▲	方向や教室名がまったく分からない。	友達に自分のお気に入りの場所を伝えられない。	何も考えずに友達と活動している。

(太字は、児童に段階の違いを意識させるために強調したもの)

(2) 改善点を踏まえた本授業 (本単元) における考察

前述した改善点を踏まえて本単元を行った。その考察を、項目ごとに以下に述べる。

まず、改善点①については、授業の導入段階で、マッピングを活用してパフォーマンス課題を児童と

作成し、共有した(図3)。そして、児童に単元のゴールから、お気に入りの場所の紹介や道案内に必要な表現を尋ね、その表現に十分に慣れ親しませるようなゲーム活動を設定した。慣れ親しむ活動の手立てとして、掲示物を工夫したり ICT を取り入れたたりして、活動がつながるようにした。そして、児童に問いかけながら授業を進めることで、これまで学んだ表現を全体で確認することができた。また、やり取りの際にも、相手意識や目的意識をもって、どうにかして相手に伝えようという気持ちをもって取り組む児童の姿が多く見られた。このことから、改善点①は児童の「主体的な学び」と「対話的な学び」を促すことができると考える。

次に、改善点②の丁寧な数多くのやり取りを行うようにするために、どのような表現を用いればよいか児童に問いかけ、かつ、児童がどのようにやり取りをすればよいか試行(練習)する場面を設定した。更に、中間指導を複数回行い、やり取りの態度面や使用している表現、反応(やり取り)の様子、そして、児童が活動する際に戸惑った場面や表現についての確認や指導を行った。この中間指導を通して、児童が自身のやり取りを振り返ったり改善したりできるような場を設定した。改善点②についても、児童の「主体的・対話的な学び」を促す手立てになると考える。

そして、改善点③については、振り返る活動を十分に行える時間を設定した。時間の初めに本単元のパフォーマンス課題を確認したり、本時のループリックを共有したりした。ループリックについては、やり取りの初め(1回目のやり取り後)に、本時までの児童自身の活動を振り返り、現在の自分の位置を確認して、本時の活動を行うことができるようにする。そして、活動後に、再度同じループリックを用いて自分の伸びや学習の足跡が分かるようにする。それにより、児童が本時や本単元のゴールに確実に向かっているか教師が児童に確認したり教師自身が児童の活動を見取って判断したりすることができた。改善点③については、児童がどのようにめあて立て、見通しをもって活動し、どのような学びを得ることができたかを主観的、客観的に振り返り、次時以降の活動につながったという点で、児童の「深い学び」を促すことができると考える。

7. おわりに

5月の授業実践とそれを改善した授業実践を通して、前者からこれまでの自己の外国語活動の考え方や実践について振り返り、児童の「主体的・対話的で深い学び」を育てる外国語活動の在り方について考えることができた。そして、後者の実践では、5月の授業実践を踏まえた改善点を基に授業を行ったことで、少しではあるが児童の「主体的・対話的で深い学び」について方向性を見いだすことができた。また、CAN-DO リストについてはループリックという形にしたことで、教師と児童が共有するだけでなく、それを用いて活動を振り返り、次の活動に生かしやすくなった。その点で、今後も活用できると考える。また、TLC サイクルについては、2つの実践では、うまく活用できず、それぞれが該当する場面が明確にならなかったため、今後は違う形で活用できるように考えたり、活用できる場面を探ったりしていきたい。

以上のことから、いろいろな手立て等を考えながら今後も継続して、児童の「主体的・対話的で深い学び」及び児童の伝え合う力の育成に向けて研鑽と実践を重ねていきたい。

〈引用・参考文献〉

- 大城賢, 2017, 『平成 29 年版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 外国語』東洋館出版社。
佐賀大学教育学部附属小中学校, 2020, 『研究紀要 第5号』。
文部科学省, 2018, 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』開隆堂。